

参 考 図 書 紹 介

蜂具などの導入までの基礎知識、第3章では女王蜂の操作、分蜂の防ぎ方、群勢の維持、病気・害敵などのハチミツ生産に向けた管理法、第4章では年間を通した蜜源植物の基礎知識、第5章では養蜂生産物について、それぞれ分かりやすく解説されている。しかし、記述の中に「蜜囊の中でショ糖を分解」、「働き蜂は腋の下からロウを分泌」、出房までの日数を「雄蜂が19日」、「ホルモン(フェロモンともいう)」などの大きな誤りが目に付くのは残念である。ま

た初めてミツバチを飼う場合に最も気になる点は蜂群管理であるが、著者の体験から、内検の前に「巣箱を軽くトントンとたたいてから蓋を開ける」とある表現は、蜜不足の時などその刺激で攻撃的になる場合もあり、問題であると思われる。砂糖液の作り方についても「1斗カンに砂糖10キロ」と1~2群から飼育を開始する際には、余りにも多い量であり、砂糖とお湯を1:1で溶かすなど、初心者向けの配慮が欲しかった。(吉田 忠晴)

国 際 ミ ツ バ チ 研 究 協 会



雑誌紹介

Bee World 78 巻2号 (1997) には5編の論文が寄せられている。

1989年5月と1993年4月の2回にわたってパキスタンを訪れたCraneは「インダス川流域地方やその近辺におけるコミツバチの養蜂」という論文を寄せている。この地方は砂漠に囲まれており、ミツバチはコミツバチ一種しか生息していない。「養蜂家」たちはこの蜂の小さな一枚巣を維持して蜜圈のみを収穫したり、流蜜期に大きな植物群落のそばへ巣を集めてきて設置することで蜜を集めさせたりしているのだという。

Dung et al. は「ベトナムにおける化学物質を使わないダニ類の防除の実際」と題しベトナムで養蜂家が利用して効果を上げている生物学的防除の手法を紹介している。それによれば、巣板の一部あるいは1枚全部を雄巣房にし、その巣房にミツバチヘギイタダニを集めて取り去ったり、女王蜂の更新時もしくは流蜜期に、女王蜂と蜂児を操作することで一時的に無蜂児

期間を作り出すことでミツバチトゲダニを、またその直後に作られた蜂児圈を蓋掛け直後にすべて取り去ることで、そこに集まったミツバチヘギイタダニを完全に防除できるようである。

Goodwin は「砂糖水給餌によるポリネーション効率の改善について」と題した総説を寄稿している。

Bee World 78 巻3号 (1997) には5編の論文が寄せられている。

Crane は「貯蜜性昆虫を利用しない植物からの甘味の収穫」と題して、ハチミツ以外の甘味を人間がどのようにして植物から集めてきたのかについての総説を寄稿している。ハチミツと果物以外の甘味を大きく花蜜、甘露(アブラムシの排出液)、マナ(甘露の乾燥したものなど)、樹液(サトウキビやサトウカエデの樹液、ヤシの花蜜など)に分け、それぞれについてどの国の住民がどのように利用しているのかを詳しく述べている。

Youhua は「中国南部におけるトウヨウミツバチの冬季主要蜜源植物フカノキ」と題して、興味深い蜜源植物であるフカノキをくわしく紹介している。

またLakshmi and Suryanarayana は「ジンガムノキ」と題して東南アジアとアフリカに分布しインド乾燥林の主要構成木であり街路樹

国際ミツバチ研究協会

としてよく使われているウルシ科のジンガムノキを蜜源植物として紹介している。

Echazarreta et al. は「ユカタン半島における養蜂の発展と現状」を紹介している。ハリナシバチ養蜂からセイヨウミツバチを使った近代的養蜂へと移り変わった歴史や、小規模養蜂家が国際的に競争力のあるハチミツを多量に生産し輸出している現状、また抱えているアフリカ蜂化ミツバチ、病気やダニの問題、それから今後の展望などが述べられている。

Journal of Apicultural Research 36 巻 1 号 (1997) には 6 編の論文が掲載されている。

Bozic and Woodring は「ミツバチの活動が血糖値に与える影響について」という論文でいろいろな状態にある働き蜂の血糖を計測した結果を示し、活発さとの関連について考察している。例えば逃去中の血糖では、トレハロースがほとんど消失していたが、逃去が終わった 1 時間後には元の値にまで戻っていた。巣でダンスを踊っている蜂の血中トレハロース値は、巣にとどまっていたものに比べて低く、秋の蜂に比べて春の蜂の方が血中トレハロース値は低かった。またしばらく雨が続いたあとで晴れた初日の方が、晴れが続いていた日に比べて、ミツバチは興奮状態で、血中グルコース値は高かったが血中トレハロース値は低かった。

Tan et al. は「たる木を用いたオオミツバチ養蜂：営巣率に影響を与える諸要因」という論文を寄せている。いろいろな場所に向きや大きさ、角度などを変えてたる木を設置して、それにオオミツバチが営巣した割合をそれぞれ比較している。

Journal of Apicultural Research 36 巻 2 号 (1997) には 4 編の論文と 2 編の短報が掲載されている。

Michaelson-Yeates et al. は「アイソザイムを使ったミツバチとマルハナバチによるホワイトクロバターの受粉状況の検討」で、2 種のハナ

バチがどのように訪花したかについての検証を行っている。アイソザイムをマーカーとして用いることで、花がどこの花から花粉を受けとったのかを調べることができるが、その結果からミツバチの方がマルハナバチよりもひとつの株から多く訪花せずに、多くの株を広範囲にわたって訪花する傾向があると筆者らは推察している。

Echazarreta and Paxton は「メキシコのユカタン半島におけるアフリカ蜂化ミツバチとセイヨウミツバチのコロニー成長パターンの比較」という論文で、年間を通じた有蓋蜂児圏の大きさの変動を 2 種の蜂で比較している。有蓋蜂児の面積は総計でわずかにセイヨウミツバチの方が広いものの、アフリカ蜂化ミツバチの方が早く最大面積に達し、コロニーが早く発達することが示唆された。またアフリカ蜂化ミツバチの方が雄蜂児圏を作りやすい傾向にあったが、全蜂児圏に占める雄蜂児圏の割合は最終的に 2 種間で違いがなかった。

Apicultural Abstracts 47 巻 4 号, 5 号 (1996) には文献番号 1165/96~1527/96 の 353 編が収録されており、このうち日本からは 12 編の論文が掲載されている。なお 5 号は巻末索引のみとなっている。

Apicultural Abstracts 48 巻 1 号 (1997) には文献番号 1/96~345/96 の 345 編が収録されており、このうち日本からは 15 編の論文が掲載されている。

Apicultural Abstracts 48 巻 2 号 (1997) には文献番号 346/96~724/96 の 379 編が収録されており、このうち日本からは 16 編の論文が掲載されている。

Apicultural Abstracts 48 巻 3 号 (1997) には文献番号 725/96~1104/96 の 380 編が収録されており、このうち日本からは 7 編の論文が掲載されている。

(中村 純)